

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第740号 平成26年5月23日

富岡製糸場

今年の4月に開催されたユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）において、群馬県富岡市にある「富岡製糸場」が世界文化遺産として登録する事が適当との勧告が行われました。これによって、本年6月ドーハで開催される第38回世界遺産委員会で、正式に世界文化遺産として登録される見込みとなりました。

この「富岡製糸場」は、明治政府が日本の近代化のために、明治5年（1872年）フランスの技術を全面的に導入して設置した、官営の機械製糸場です。

日本は、明治維新によって近代国家への道を歩き始めましたが、先行する欧米諸国に追いつくために取られた政策が「富国強兵」「殖産興業」です。しかし、「富国強兵」にしても「殖産興業」にしても、そのためには膨大な資金を必要とし、それを支えたのが、我が国にとって最大の輸出品目であった生糸でした。

「あゝ野麦峠」の著者である山本茂美氏は、生糸産業を巡る状況について「当時の貿易年鑑をみると、驚いたことにその輸出の大半が生糸関係（生糸、絹織物、蚕種）で占められている事に気づく。つまりそれより他に売るものがなかったということであろう。特に明治前半の貿易はこれが極端で60パーセント前後が生糸で占められている。」と述べると共に、生糸は「他の輸出品と違い、原料、技術のすべてが国内で自給できたところに、明治の国際収支に決定的な威力となっていた」と述べています。

こうした中、政府は、最も大きな外貨の稼ぎ頭である生糸産業を更に振興させようとしませんが、当時はまだまだ民間の力が弱かったために、自ら官営による模範工場を設置する事にしたもので、富岡製糸場は当時としては世界最大規模の製糸工場でした。

この製糸場には、全国から女工を募集し、機械製糸の指導者となるための技術を伝習するという役目も担っていました。この富岡製糸場での伝習を終えた工女達はやがてそれぞれの出身地へ戻り、我が国の製糸産業を支えて行く事になります。

ところで、群馬県の富岡が官営製糸場の建設場所として選ばれた理由は、養蚕が盛んで、生糸の原料の繭が確保できる事、製糸に必要な水が確保できる事、燃料の石炭が近くの高崎等で採れる事、外国人指導の工場建設に地元の同意が得られる事だったそうです（富岡製糸場ホームページから）。養蚕が盛んだったというのは当然

としても「外国人指導の工場の建設に地元の同意が得られる事」というのは、黎明期の日本の地域事情を垣間見る思いがします。

富岡製糸場は、開設当初なかなか女工が集まらなかったそうです。信州松代の旧藩士の娘和田（旧姓横田）英が富岡製糸場での生活等を書き記した「富岡日記」の中には、長野県庁から13歳から25歳までの女子を何名か富岡製糸場に出すようお達しがあったのだけれども、血を取られるの、油を搾られるのと大評判になって誰一人応じる人がなく、当時松代区長をしていた父親が意を決して娘である私を富岡に出す事にしたと書かれています。

さて、製糸場といえば「あゝ野麦峠」で描き出された「女工哀史」を連想する方も多いと思いますが、富岡製糸場ではどうだったのでしょうか？

「富岡製糸所工女資料（たかせとよし著）」によると、勤務時間は日の出から日没までとされており、冬期は9時間、夏季は12時間（ただし休憩時間を除く）労働だったようです。また、休日については「天長節並びに7節その他月々日曜日休暇の事」とされており、週6日制だった事が分かります。

和田英の「富岡日記」には、「隣の人と一言でも話しますと『しゃべってはいけません』としかられます。」と書かれており、職場規律は相当厳しかった事が伺われます。この様に、富岡製糸場における労働条件は、現代の感覚からすれば相当に厳しいものがあったようですが、富岡製糸場は官営で、かつ、模範工場として開設された事もあり、たかせとよし氏は「少なくともその初期においては利潤追求の生産というよりも、模範工場、あるいは研修所というような性格が強く、のちに当然のことながら“女工哀史”を生み出す要素をもっていながらも、まだその前の段階だったとみるべきだと思う」と述べています（同氏著「官営富岡製糸所工女資料」から）。

これは逆にいうと、各地に作られた製糸場が利潤追求の中で労働環境が如何に劣悪で悲惨だったかという事でもあり、その事は細井和喜蔵氏の「女工哀史」に詳述されています。

「あゝ野麦峠（山本茂美著）」の中には、どこかでこんな歌を聞いたことがあると、製糸女工達の間で歌われていたであろう歌が紹介されています。

袂に小石を拾いこみ
死ぬる覚悟をしたけれど
死ねば会社の恥じとなり
帰れば親娘の恥じとなる
思えば涙が先に立つ

製糸女工達は、和田英等ごく一部の例外を除き、皆物いわぬ人々であり、日本の近代化を支えた製糸産業、そして、その製糸産業を支えたのはそうした夥しい物言わぬ人々であった事を、私達は富岡製糸場の世界文化遺産登録を前にして、改めて思い起こす必要があるのではないのでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）